



開館五周年記念

丸木夫妻の「原爆の図展」開催

ピースあいちは2007年5月4日に開館し、今年で5周年を迎えます。開館以来毎年、記念行事として「ピースまつり」と「特別展」を開催していましたが、今年は5周年という節目の年にあたり、特別展として丸木美術館の御好意により、丸木位里・丸木俊さんの「原爆の図」(全15部)のなかから第5部「少年少女」と第12部「とうろう流し」をお借りし、「原爆の図展」を開催します。期間は学校が夏休みの7月28日(土)から8月31日(金)までです。

原爆の図の展覧会が愛知県で行われるのは、1986年の丸木位里・丸木俊原爆の図愛知展(愛知県美術館)、2007年の「原爆の図」丸木位里・俊展(高浜市かわら美術館)以来のことで、「少年少女」「とうろう流し」は1986年の同展以来26年ぶりのことです。

この展覧会と併せて、丸木俊さんの自伝『丸木俊—女絵かきの誕生』を俳優の山田昌さんによる朗読会を予定しています。

また愛知一中予科練総決起事件の記録である「積乱雲のかなたに」をもとにしたあらたなシナリオによる、天野さんの朗読会も準備中です。

周年記念の「ピースまつり」も例年同様にゴールデンウィーク中の5月5日、6日に開催いたします。2日間にわたり、無料開館のもと、コンサートやバザーを行い、皆様と共に5周年を祝いたいと思います。

いよいよ5周年を迎えるピースあいちです。ここまで来ることができたことに、来館いただいた市民のみならず、会員、役員、ボランティアスタッフのみならず改めて感謝し、次の5年に向けて、歩みを進めたいと思います。

丸木位里(1901～95)、日本画家。**丸木俊**(1912～2000)、洋画家。広島生れの位里は原爆投下後3日目に広島に入り、惨状を目にした。その時の痛ましい事実を伝え、二度と惨事が起きない願いを込めて、俊とともに「原爆の図」を1948年に第1部「幽霊」を描き始め、80年第15部「ながさき」を以て完成させる。今回、展示されるのは建物疎開に動員され、亡くなった少年少女を描いた第5部(写真上)と、広島で毎年行われている死者への鎮魂を込めて流す灯籠流しを描いた第12部(写真下)である。



特別展 「震災と戦争展～東南海・三河そして東日本大震災」

隠された二つの地震

東日本大震災が起きたのは2011年3月11日のことでした。この地震は「戦後最大の事件」となった原発事故を引き起こしました。ピースあいちでは「戦争と平和の資料館」にふさわしい企画として2月28日から4月21日まで「震災と戦争展」を開催しました。

ときは67年前のアジア太平洋戦争末期、東南海・三河という二つの大きな地震が東海地方を襲い、死者だけでも合わせて3500名以上という大きな被害がありました。この二つの地震は、戦局が悪化した時期に起きた地震であるため、人災としての様相を色濃く帯びることとなりました。

一つは、東南海地震(1944年12月7日)では軍需工場に勤労働員された学徒の犠牲が多く、三河地震(1945年1月13日)では疎開先で犠牲となった学童が多いことです。いずれも戦時下ではなく、平和な時代であったなら奪われることのない生命でした。

もう一つは、これだけ大きな地震ですから、きっと新聞などでも大きく取り上げられたらと思うのですが、実際に当時の新聞を見てみると、探すのに苦労するほど小さな記事しか載っていません。しかも被害についてはまったくふれておらず、東南海地震の翌日(1944年12月8日)の「中部日本新聞」は、「天災に怯ま



ず復旧」「闘志は满满」と、かえって戦意をあおるような論調になっています。外国の新聞、例えば敵国であったアメリカの12月8日付「ニューヨーク・タイムズ」は、遠い日本の地震について、専門家のコメントもまじえながら、かなり詳細に分析しています。つまり最も情報を必要としているはずの日本の国民は知らされず、外国の人々の方がその情報を手に入れていたことになるのです。被害の情報のないところに支援は届けられません。また、戦争の最中ですから外国からの援助も望めませんでした。

今回の特別展で、とくに強調したいのは、このような震災と情報の問題です。そして震災と情報を切り口にして、戦時下の震災と今回の東日本大震災・原発事故をとらえた場合、67年の時間を超えてそこに見いだされるのは「知らされなかった私たち」の存在にほかなりません。

今回の特別展では、三河地震で11人の子どもたちと先生が犠牲になった妙喜寺(西尾市)の先代住職が子どもたちと先生の「延命」への願いをこめてつくった「師弟延命地藏菩薩」を、特別のご好意により展示しました。また、東南海地震で甚大な被害を受けた半田の軍需工場と市街地を偶然とらえた米軍の偵察写真など、いままで市民の眼にふれる機会がなかった「実物資料」をたくさん展示しました。



展示された師弟延命地藏菩薩

戦時遺品を整理・分類 —愛知県の事業受託—

「ピースあいち」では、毎年企画展をはじめ各種のイベントを催していますが、新しい事業も一階展示室のリニューアルをはじめ幾つかを予定し、既に実施しています。

そのうちの一つに愛知県からの受託事業があります。愛知県には県民から寄せられた戦時遺品が約

7,000点ほど保存されています。将来、こうした資料を常設で展示する資料館を開設するためには、事前に整理・分類しておくことが必要です。

その仕事を「ピースあいち」が受託して行うことになった次第です。博物館相当施設としての「ピースあいち」に相応しい仕事となりました。

第2回「ピースあいち」寄贈品展 —2011年12月8日～ 2012年2月18—

戦時遺品の寄贈相次ぐ

昨年の12月から今年の2月にかけて、開館以来4年ぶりの寄贈品展を開催した。当資料館の開館後の所蔵品は、すべて寄贈品である。このところ、こうした寄贈が相次いでいる。それだけ、県民・市民の間に当館の知名度が高まったものと思われる。

寄贈された戦時遺品は、開館時の寄贈品も含めて1250点(寄贈を受けた際に同種のもの複数あっても1点とするため、品物の数は、はるかに多い。)を超えている。常設で展示される資料は限られているので、今回はご寄贈いただきながら展示できずに保管してあったものを観ていただくことにした。

このたびの企画展では、使用目的で「生活用品」と「戦時用品」との二つに分けた。

「生活用品」では、「戦時・戦後の新聞」が貴重である。開戦から終戦までの新聞を製本したもの。膨大な数の戦時下の回覧板、爆弾の破片が貫通した本。名

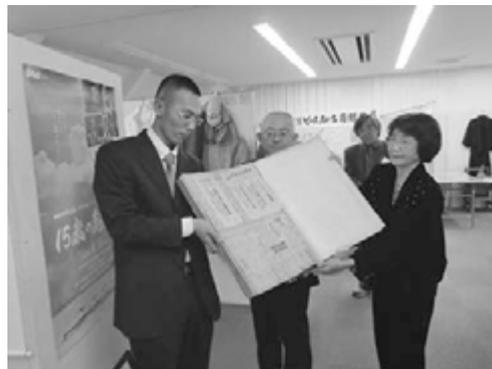


古屋から田舎に集団疎開した小学6年生たちが作ったカルタが珍しい。

「戦争用品」で痛ましいのは、15歳で予科練(海軍予科練習生)に志願し、17歳で沖縄の空で行方を絶たれた旧制愛知一中(現旭丘高校)の鈴木忠熙さんが残した関係資料で、弟の隆充さんからご寄贈いただいた。1月21日には鈴木隆充さんによる写真や資料を交えてのお話を聞く会を催した。その中で鈴木さんは、

軍国教育の怖さや予科練の実態がもっと伝えられるべきだと語られた。

「無駄な死、無残な死、無念の死」—これは展示に際して鈴木さんに若者へのメッセージをお願いして頂いた文の言葉である。



餅つきで始まった「ピースあいち年末祭」

12月10日、空は快晴、風もなく絶好の日和の中、『ピースあいち 年末祭』が行われた。

11時開館とともに、前広場では、石臼での餅つき、1階交流の広場では「バザー」が始まる。餅つきには、子どもたちが、飛び入りで餅つきを体験する場面も…。つきたての餅は、餡ころ餅や黄粉餅になって待ちかねていたお客様に販売された。最後の四臼目には真っ赤な小エビに似た「アミ」が投入され、赤く染まった美しい餅が完成。ほんのり甘く美味だった。

1階交流のひろばでは、恒例のバザー。“お値うち商品”に待ちかねた人たちが殺到。今回は“ぬいぐるみ”がたくさん出され、子どもや孫の土産にと好評だっ

た。またバザーの片隅では、「スタンピング平和展」が取り組まれていた。

午後はチャン・ビン二胡演奏団の演奏。やわらかい音色が満員の客席の間を流れた。

“二胡を弾いてみよう”体験会も行われ、参加者は初めて触れる楽器に戸惑いながらも弦を弾いていた。



平和へのメッセージ

明るく笑顔で接したい——太田 君子

私が「ピースあいち」のボランティアに参加するようになったきっかけは、友人(ボランティア)が講師として勤務することになり、ボランティアができなくなり、友人の代わりにやってみようと思ったからです。

私は、「ピースあいち」の存在すら知らなかったのです。無知からの出発でした。

初めての参加は、2階の展示室の当番でした。まず、ゆっくりと室内を一周してみました。私が気になった場所では、じっと身を入れて資料を読みました。しばらくすると、何か重々しいものが、私の肩にのしかかってきたのです。やはり、私の知識の乏しさに対する罰なのかなと思いました。学ばなければいけない少しでもこの資料館から知識を得よう。戦争と平和のことを切実に自分のものとしようと感じました。

来館者の人達の中で印象に残った人を書こうと思います。

五十代の男の人。「僕は、この館が左寄りだと思

ていましたが、そうじゃなかったんですね」。私は、「すごい資料館ですよ。寄贈品が多いです」と答えました。

大学生(男性)・「中学校の教師を望んでいます。戦争のことを、どうやって教えたらいのでしょうか?」。私は、「この館で分かったことを貴方なりに理解して、貴方の言葉で話してあげれば良いのではないのでしょうか」と言いました。とても熱心にメモしたり、写真を写したりしていました。

小学生・「鶴を折っていいですか?教えて下さい」「僕は、初めて鶴を折るんです」

私は、今は、来館者に館の資料を詳しく説明ができません。でも、「ピースあいち」に来て下さる人達に、明るく笑顔で接することはできます。人との関わりを大事に、この仕事をしていきたいと思っています。



将来に希望をもって貫う場にしたい——榊山 潤

私がピースあいちでのボランティアに参加して半年が経過しました。終戦から今年で67年が経過し、証言をなさる方も減る中で、ピースあいちが担うべき役割は年々大きくなっていると思っています。

私もそうですが既に戦争を知らない世代が多数を占め、戦争は遠い記憶の一面に追いやられた感さえします。それどころか、若い人の中には戦争の時代の存在を知らない、或いはあの戦争を解放戦争であったと信じて右傾化の兆しさを見られます。そうした時代にあるからこそ、私はもっと多くの人に、特に若い人にピースあいちを見て頂きたいと思っています。

現在ピースあいちの運営はボランティアが中心となっており、その経営など課題は多く、決して楽観できるものではありません。一方、だからこそ柔軟な発想ができ、常に館内に明るい雰囲気満ちているともいえます。

私がピースあいちでボランティアをして常々思うの

は、常に館内が博物館らしくない明るい柔らかな空気に包まれていることです。博物館らしい堅苦しい空気が皆無とは言いませんが、ボランティアの方々の人柄や、またピースあいちの構造がそのように思わせてくれるのだと感じています。

私がボランティアに参加して以来、来館される若い人々が真剣な目で展示を眺めていけるのも、その現れではないでしょうか?

またピースあいちは、ただ単に戦争に関しての展示をする場ではありません。そこに来たお客さんに平和を考えてもらい、将来に希望をもって貫う場でもあります。

今のピースあいちは、まさにそれに当てはまる場になっていると思います。そうして今後も、そうした場であればならないと思います。



平和へのメッセージ

自分なりに勉強できた——山田 哲司

2010年5月からボランティア活動をはじめました。その数年前に職場の「平和フォーラム・住都」の活動で「ピースあいち」にきたことがあり、そのとき職場の大先輩の竹川さんがボランティアをしておられることを知りました。

2010年の秋、八百津へのツアーに参加してから皆さんと親しくおはなしができるようになりました。いろいろな班の活動にもお誘いをいただき、少しずつ活動の範囲が広がっています。あまり参加できないので申し訳ないのですが。

ガイド研修にも参加し、これまでに数度ガイド活動をしました。研修や子供たちのガイドをするなかで自分なりに勉強ができ、ボランティアに参加してとてもよかったですと思っています。

はじめてのガイドは、中学一年生の皆さんでした。事前に「どうして戦争は起きるのか」「どうしたら戦争はなくせるのか」などの質問がよせられていました。安井さんと二人で一生懸命考えて「回答」をつくりました。こ

んな素直な子供たちがいるということを知り、本当に感激しました。日本の未来は大丈夫だ、と思いました。

また、語り部の方のサポーターとして知多の小学校に行ったこともあります。先生方の「戦争は許さないぞ」という姿勢が教室から廊下にまであふれていて、とても感動しました。このような「館外での活動」もとても重要だと思いました。来館者を増やす努力の他に、このような「出前」活動がとても有効なことに思います。

土曜日の映画も好評です。山田もメンバーである「あいち平和映画祭」の実行委員も何度も見に来ています。

最後に、昨年秋からボランティア数名でテニスを楽しんでいます。月に一回、東山公園テニスセンター屋内コートです。日焼けの心配もありませんので、皆さんのご参加をお待ちしています。意外な方に会えるかも。



自己形成のための勉強の機会——吉田 幸代

ピースあいちは、日頃、戦争と平和について考える資料館として、平和活動をしている。それと同時に、様々なイベントや講演会も企画して行っている。その中の、年末感謝祭について書きたいと思う。

その年末感謝祭は、平和な社会で無事に過ごすことができたことに感謝するイベントである。昨年も、餅つき大会や、バザー、コンサートが開かれた。来館者の方々や地域の皆様が、大勢いらっしゃったお陰で、実り多くて、楽しい1日となった。

前日の準備、当日の役割分担のために、ボランティア仲間の人たちといっしょに、私もスタッフとして参加した。餅つき担当、バザー担当などグループごとに作業する時に、手際よく、能率的に準備が進み、片づけも、どんどんきれいになっていく様子に驚いた。ボランティア精神の手本として、私もこれから少しずつ学びたいと思った。

このような小さな資料館での「つどい」であるけれども、生かされている命に、精一杯感謝するエネルギー

が集まったような熱気だった。そのエネルギーが、世界じゅうに、広く伝わるとよいのにと思った。

そのために、ピースあいちが、地域の資料館として、さらに存在価値を高めていくにはどうしたらよいのだろうか、考えることも大切だと思う。そのような平和を願うことの難しさは、まだまだたくさんあるが、しっかりと取り組みたいと思う。

世界各地で、地域・民族紛争があり、多数の死者や難民が出ているという。水や食料もなく、貧困や飢餓で苦しんでいる国もある。戦争を知らない私は、平和な日本で、恵まれた生活を送っているのだから、やっぱり、どこかのんびりしている。平和運動を続けることは社会のためであるが、自分の財産にもなる。だから、自己形成のための勉強の機会と思って、根気よく努力したい。



平和の尊さを訴える

—2011年度「語り手の会」の活動—

■平和学習支援事業

愛知県・名古屋市設置の「戦争に関する資料館調査会」から受託して実施している「平和学習支援事業」は3年目を迎え、小中学校13校のほか本年は上記調査会が毎年行っている「収蔵資料展」会場の中で一般県民を対象にした「戦争体験を聞く会」をみよし市文化センターで2回開催しました。合わせて15回実施し、派遣した語り手は15名、聞き手は1379名に上りました。

東海市立富木島小学校では、最高齢者の上野三郎さん(97歳)に“地獄の海から生還”した奇蹟の体験を語っていただきました。



自分で描いた絵を使って語る
上野三郎さん

■夏の戦争体験を語るシリーズ

2011年の夏も8月2日から13日までの間、「語り手の会」のメンバー10名の方々に登場していただき、「戦争体験を語る集い」をピースあいち1階交流広場で開催しました。10名中6名の方が初めての語り体験でした。総計308名の聴衆に聞いていただきました。

■その他の語り活動

上記二つの活動の他、愛知県下の小中学校や各種団体からの要請に応じて「語り手の会」のメンバーを派遣したり、「ピースあいち」を訪れた学校・団体に対

して戦争体験を語る活動は37回を数えました。語り手は延べ44名、聴衆は1500名に上りました。

■本年度の成果

「ピースあいち語り手の会」の活動として、3100名余の人々に戦争体験を伝えることができました。実施した回数は62学校・団体に上り、これまでの最高に達しました。

実体験者の戦争体験は、特に児童・生徒に大きなインパクトを与え、どの子どもたちも二度と戦争は起こすべきでないとの感想文を書いてくれたことが語り手たちを勇気づけてくれました。

団体見学

平成23年度の来館団体数は47、大人538人、子どもは773人でした。

この中には、学校から来た先生や児童も含まれています。名古屋市立の小学校では平成23年度から従来からの社会科だけでなく、国語の教科書でも平和について考える項目ができたとのことで、初めて来館したというある6年担当の先生は「戦争と平和を勉強するのに、ピースあいち是最適ですね」と話していました。

子どもたちの中にも、戦争体験者から直接、話を聞いたり、ガイドの説明を受けたり、戦時中の展示物などを見たりして「教科書だけでは分からないことをここで学んだ」と感想文を書いてくれた子もいました。

今後、学校の社会見学という行事の一つに選ばれて、来館者が増えることが期待されます。

前年より大人の団体入場者が増えましたが、これは大学の先生が学生に「ピースあいち」を紹介してくれたことが一因になっています。

資料館探訪 5

岐阜空襲を展示

—岐阜市平和資料室—

岐阜市平和資料室はJR岐阜駅に隣接するハートフルスクエアGの一番奥まった所にある。大きさはピースあいちの1フロアぐらいで狭い。そのために、「岐阜



市空襲」に絞って展示している。説明文も少なく、展示物を見て入室者が考えるという体裁を取っている。

空襲で焼かれた市街地の写真が壁面いっぱい飾られている。鉄筋の建物が僅かに残っているだけで、東日本大震災の際、津波で根こそぎ街がなくなった東北の町と同じである。

展示物は溶けたガラス瓶や焼けた陶器など、市民の手で発掘した戦災遺品である。展示品の中で、岐阜オリジナルのM69収束焼夷弾のレプリカは臨場感がある。

岐阜で反戦を叫んだ浄土真宗の僧、竹中彰元の1コーナーが設けられている。市民展示スペースもあり、小さいけれど工夫がされている。無料であるが、無人であるため話がきけないのが残念である。(N)

東海地方で多彩な活動—戦災・空襲記録づくり第27回東海交流会に参加して

2011年12月11日に「東海交流会」が「ピースあいち」で開かれました。「東海交流会」とは、東海地方で戦災や空襲を調査記録している市民団体が年1回集い、それぞれの取り組みを交流するために東海3県で始まったもので、今回で27回を迎えました。今回の参加は東海地方5県19団体43人が集い、活発な交流がおこなわれました。

特別報告は3つあり、①鈴鹿の会から格納庫の保存をめざした「鈴鹿海軍航空隊基地保存運動の取り組み」、②見晴台考古資料館学芸員から近代遺跡としての保存をしていくために実施された「豊川海軍工廠跡近代遺跡調査報告」について、③「ピースあいち」から小中学校へ戦争体験の語り手を派遣する「愛知県・名古屋市平和教育支援事業について」でした。

各地からの交流では、岐阜・豊橋・豊田・愛知平和のための戦争展・静岡・岡崎・全傷連・空襲連・半田・瀬戸から「戦争体験の継承と保存」の取り組みが、小田原・三重歴教協・学童疎開・戦争遺跡研究



会から「調査と記録」の取り組みが報告されました。

最後に、2012年8月18日(土)から20日(月)まで「第16回戦争遺跡保存全国シンポジウム三重県鈴鹿大会」が開催されること、同8月25日(土)から26日(日)まで名古屋市立大学で「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議第42回愛知大会」が開かれることが紹介されました。「ピースあいち」ははじめ東海地方の活動に全国から期待が寄せられています。(金子 力)

●市民からの寄贈 《資料班の活動》

ピースあいちの特徴の一つは、開館後増えた資料は、すべて「市民からの寄贈」によるものだということです。開館後5年たった今も毎月2件程度の寄贈があります。1件で資料が50点近い場合もあります。資料班では毎週金曜日に交代の人も含めて5人が、さまざまな思いのこもったそれらの遺品を分類し、番号を付け、写真を撮ってデータベースに入れるという地味な仕事を、ワイワイガヤガヤ楽しくやっています。

●地下鉄・全駅への

PRのチラシの配架 《広報班の活動》

平成22年10月に22駅1,650枚から始まった名古屋市営地下鉄の駅へのイベントチラシの配架は2～3か月に1度の頻度で行い、徐々に駅数を増やしてきた。平成23年10月からは、全駅(85駅)となり、名古屋市内の図書館・生涯学習センター・文化小劇場等含めて127拠点に5,500枚のチラシの配架をし、ピースあいちの告知をすると共に企画展へのお誘いを行っている。

●映画上映会 (映像による学習会)

毎月第2土曜日の午後4時30分から、戦争、平和に関わる名作、懐かしの名画を上映してきました。お蔭さまで、常連の方も見受けられるようになりました。(参加無料)

- ◆10月8日「チャイナシンドローム」(1979年アメリカ作品)参加者13名
- ◆11月12日「ノー・ニュークス」(1979年アメリカ作品)参加者23名
※名古屋市立大学 平田雅巳助教授の映画解説付き
- ◆12月10日「ピースあいち・年末祭」のため中止
- ◆1月14日「シルクウッド」(1983年アメリカ映画)参加者36名
- ◆2月11日「ゴジラ」(1954年日本映画)参加者6名
- ◆3月19日「名古屋大空襲を語る」(2012年日本映画・

森 零監督)参加者75名

この日は月曜日でしたが、恒例の「名古屋空襲犠牲者追悼の夕べ」に合わせて上映。



今回の報告の最大のポイントは、「福島原発事故」を意識した上映会です。特に、「チャイナシンドローム」は、アメリカのスリーマイル島原発事故の12日前に上映された作品。そして、「ノー・ニュークス」はこの原発事故に抗議してアメリカで大々的に開催された若者たちを中心にした「ライブ・コンサート」のドキュメンタリー映画です。

また、名古屋市立大学の平田助教授の参加も、私たちの取り組みにとって、大きな支えとなりました。



ライブアルバム

1階の「現代の戦争と平和」の展示が新しくなります

ピースあいちが開館5周年を迎える節目に、1階の展示をリニューアルします。現代の世界情勢は刻々と変わっていくので従来の展示はデータが古くなり、リニューアルはこの間の大きな課題でした。このニュースがお手元に届く頃には、新しい展示のお披露目ができると思います。

昨年の秋から今年にかけて、調査研究会のメンバーを中心に新しい展示づくりに取り組んできました。新しい展示は、20世紀以降に起こった戦争の事実と平和の歩みを年表的にまとめ、上下に写真を配し、わかりやすく、見やすいものを目指しました。

昨年開催の4周年特別展「現代の戦争と平和」開催の成果が生かされています。パネルの一部を可動式にして、今後の世界情勢の変化にも対応できるように工夫しました。展示デザイナーの小澤忠之さんのご助力によるものです。中央には、映像を写せるテレビ画面も入れました。どうかご期待ください。

この展示リニューアルや「原爆の図展」開催などの事業をモリコロ基金・一如社の助成を得て準備中ですが資金が不足しています。またNPOの財政強化も必要なので「ピースあいち開館5周年記念募金」を予定をしています。絶大なご支援をお願いいたします。

「ピースあいち」は「博物館相当施設」です。

「ピースあいち」は名古屋市で7番目に愛知県教育委員会から指定された「博物館相当施設」。(博物館法上の博物館である「登録博物館」に準じた法制上の扱いを受けるといふもの。) 平和を愛する多くの市民に開かれた場として、これからも活動していきます。

ドニチエコきっぷの提示で入館料を割り引き

名古屋市交通局の「ドニチエコきっぷ」または「一日乗車券」(当日利用)を提示していただくと、入館料大人300円→250円、小中高生100円→80円に割り引きます。詳しくは名古屋市交通局HPや地下鉄各駅で配布のガイドブック「なごや得ナビ」をご覧ください。

月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

ピースあいちの運営を支えてください。

入館者、2011年度(3月末)は4,469人(内子ども1,266人)で、開館以来の累計では32,869人(内子ども6,222人)となっています。

当館の維持・運営は、入館料とNPO会員[正会員・賛助会員]の会費及び寄付金によって支えられています。是非、会員登録して「ピースあいち」を支えて下さい。

正会員(年6,000円)は会員証提示で無料入館できます。賛助会員(年3,000円)には無料入館券一枚をお渡ししています。

また、団体・法人には、「支援団体」(年/一口1万円)として登録をお願いしています。その外、寄付も受付ています。「ピースあいち」への寄付は、確定申告で約50%が税額控除の対象となります。

【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・年末年始
- 閲覧料 大人 300円 小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階には「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示、3階には「戦争と動物たち」の展示があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーがあります。1階のみの利用は入館料は無料です。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

「ピースあいち」への交通のご案内



●編集後記●

東日本大震災が起きて1年が過ぎた。行政の復興策は一向に進んでいないし、収束宣言を出された原発事故もいまだ見通しがたっていない。しかし、人々は着実に歩み始めている。仙台の中学生が「明日という日が」を歌った。静かに広まっている。「大空を見上げてごらん／あの枝を見上げてごらん／青空に手をのぼす細い枝／大きな木の実をささえてる／いま生きていること／いっしょうけんめい生きること／なんて なんて なんて すばらしい／あすという日があるかぎり／しあわせを信じて／あすという日があるかぎり／しあわせを信じて」…中学生が歌ったことに希望がある。一陽来復という年賀状を貰った。悪いことが長く続いた後で、ようやくよい方向へ向うことという意味である。そうなって欲しいと思っている。(N)